

置珠整衣誦初段 頌曰発陀左握珠

念拜止念又置珠 式念五遍五章九

二段三段復如斯 七自五憶合掌礼

念助二遍別回向 二回一聲合三聲

懸撥移式焼香蓋 卷嘆会釈整珠衣

誦畢敬白至陀字 助音把蓮自左降

踞整後退履從左 二拜一退又一拜

先進置蓮把啓退 瞻仰頭礼還本座

註一 安永三甲午（皇二四三四）天三月 大阪順慶町心齋橋

筋筋に入 柏原屋与左衛門

南山金剛院藏版 安永二年癸巳八月南山檢校快弁序。明治

六年己丑夏五月 金剛峯寺靈瑞南竜書

靈瑞序に、田舎様法則集・弘治年間・樹下僧集。諸勤行次

第・慶長十二年・有人。諸勤行作法・万治四年・順良。法

則集・寛文十年・宥晴。諸勤行拾要集・享保十七年・少足

違・以上五本を斥非指正して三巻を編せしものといえり。

註二 作者年代不明

尚③④の論は之を略す。

真宗学の研究態度について

佐々木蓮磨

従来の真宗学の行き方について、私に疑問を懐かしめたもの

は、初期の宗学者噫慶^{いげい}が論註開書の中に祖典の解釈は祖意に従うべきであると主張し、末書偏重の弊を歎き、六要鈔の指南を絶対視した過去の学者の態度を痛烈に批判していることや、先輩の皆往院が「御文は安心の手鏡なれば、元来註釈はいらぬものなり」と説き、教王院の如きは「御文は講釈すべきものにあらねども、近來は末註もでき、講釈する人もあるなり。ところが愈々委しければ弥々違うの道理で、如何なる愚鈍なものにも合点の行くようにお書き下された御文なれど、学者の拜見で難かしく取扱う故、遂には御正意を失うようになるなり」と言っている。この批判は蓮師が「聖教は句面の如く心得べし。その上にて、師伝口業はあるべきなり。私にして会釈すること、しかるべからざること」と示されたものと全く一致するもので、真宗学研究の動かぬ指針であると思う。この指針によって宗祖の「学」に対する見方を窺うて見れば、先づ歎異抄第十二章に「本願を信じ念仏を申さば仏になる。そのほか、なにの学問かは往生の要なるべきや云々」とか「学問せばいよいよ如来の本意を知り、悲願の広大のむねをも存知して、いやしからん身にて往生はいかがなんどあやぶまん人にも、本願には善悪淨穢なきおもむきをも、とききかせられ候はばこそ、学生の甲斐にても候はぬ」と示し、末灯鈔第九章には、始めに誓願名号不離の關係を具さに述べ、次に「かく申し候も、はからいにて候なり」と御自身の説明までも否定し、「ただ誓願を不思議と信じ、また名号を不思議と一念信じ称えつつうえは、何条わがはからいをいたすべき。ききわけ、しりわくるなど、わづらわしくは

おおせられ候やらん。これみなひがごとにて候なり」と示されている。こうした意味のことは、同鈔第十章第十一章等にも明らかに示されている。これ等のおことばから窺ってみると、真宗の学は他力信心の本質を明らかにし、その信に帰入する道を示す以外にはない筈である。而も宗祖が他力信心の解明と、その信への帰入について、最も重視された要点を取り上げ、それを真宗学の研究対象とすることが最も至当な道であろうと思ふ。

私は宗祖の聖教を大別して、讃嘆の聖教と、教化の聖教と二つに分けられるように思う。もちろん厳密な区別はできないが、讃嘆の聖教としては教行信証を始めとする漢文の聖教、並びに和讃等であり、教化の聖教と見るべきは御消息集（末灯鈔、御消息集等）語録（歎異抄、口伝鈔等）類であろう。ところで、われ等宗門人として第一に為すべきことは、何んと言つても、先づ宗祖の教化に直々接して自己の救いを明らかにすることであらねばならぬ。ところで、その教化の聖教の中でも、宗祖自身が「これ以外に言うべきことはない」とまで、ハッキリ明言された言葉に取組むことが最も大切であると思う。今、そうした言葉を御消息や語録から拾ってみると、善性編御消息集第七通に「他力と申すは行者のはからいのちりばかりもいらぬなり。かるがゆえに義なきを義とすと申なり。このほかにまた申すべきことなし」とあるところと、歎異抄第二章の「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀に助けられまいらすべしと、よき人のおおせをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」とある二ヶ所を取り上げることができるよう思う。この二つの

表現をよく味読してみると、結局、念仏の行と計らない信の二つに結歸し、而も、その二つが教えを聞くことによつて体得されることが示されているように思われる。かく窺うて見ると、真実の行信が「聞」の世界に於て人間の生活となる一点を究明することが、真宗学研究の中心課題であるように思う。

また宗祖はこの真実教を讃えて「絶対不二の教」とも「一実真如の道」とも言っておられる。この思召を受けてみれば、われわれ宗門人としては親鸞教学を単に宗門内だけに通用する真実教に甘んじてはならぬ。先づ仏教の根本原理と対照して、親鸞教学が仏教に於て何なる意義と地位をもつか、と言つた点を究明し、更らに進んで一般宗教学、又は現代哲学とも対決して、親鸞教学こそ人間救済の最後の切り札であることを、自画自讃でなく公明正大な立場に於て、広く世界に示すことこそ、現代に立つ親鸞教徒に課せられた重大な使命ではあるまいか。この一事を成就する以外に真の世界的伝道もあり得ないと思ふのである。

高倉の一轍と往生の善知識の強調

松谷了玄

大谷派学寮は恵然の時代にその基礎定まり、学事は破竹の勢を以て一派全体に普及滲透し、而して学寮は宗学研鑽の中心道場としての性格を濃厚にして行くことになった。斯る学寮の隆